
成績評価基準の再考

－多様な評価基準のメリット・デメリット－

弘前大学21世紀教育センター 田中正弘

はじめに

教員は、学生の成績評価の基準を、どのように設定されているのでしょうか？

恐らく一番多い回答は、「100点満点で、90点以上なら秀、80点以上なら優、70点以上なら良、60点以上なら可、60点未満なら不可と大学が規定している」というものでしょう。それから、独自の考えで、「7割以上の出席がなければ、評価の対象としない」などの基準を定めているという回答も、多いことでしょう。

とはいうものの、多くの教員にとって、評価基準の在り方をそれ以上深く考えたことはない、というのが最も正直な回答ではないでしょうか。

ただし、曖昧な評価基準では、学生に不安を与える要因になったり、成績に関わる無用なトラブルを引き起こしたりする危険があります。中井俊樹(2010:49)の言葉を借りれば、「学生の学習成果を正しく評価することは、大学教員の社会的責務といえます」。

そこで今回は、成績評価基準を主に二つの視点から再考してみたいと思います。一つ目に、多様な基準のメリット・デメリットを整理して、授業目的に応じて基準を使い分ける(組み合わせる)必要性を議論してみます。二つ目に、評価基準から見えてくる授業改善の方法を考えてみます。

では、本論に入る前に、評価基準を設定する上での基礎的な考え方について、簡単に振り返ってみたいと思います。

評価の考え方

評価基準を定める上で、最も基本となる考え方は、絶対評価と相対評価になります。

大学教員に広く支持されているのは、絶対評価です。この評価方法では、学生に修得してほしい知識・能力・態度をシラバスの項目である「到達目標」として定め、その目標を各学生がどの程度達成できたかで、彼らの成績を判断することになります。従って、全ての受講学生が最も高い設定基準に到達しているのであれば、彼らの成績は全て秀になります。逆に、誰一人として最低基準を満たしていないのであれば、全員の成績が不可となります。

ただし、このような極端な成績評価を行うことは、今日ではクレームの火種となり、到達目標の設定に問題がある(目標が高すぎる・低すぎる)と指摘されることになります。評価基準が明確で、かつ基準設定の根拠や理由を適切に説明できなければ、たとえ絶対評価の理念の下でも正当化できない行為だと見なされます。

絶対評価と対照的な方法が、相対評価になります。この方法は、秀は5%、優は30%、良は35%、可は20%、不可は10%というように、成績の分布を予め設定しておく点に特徴があり、科目間の難易度がある程度統一できます。このため、特に小学校や中学校などでよく用いられていますが、大学でも、教養科目の選択必修科目などで、科目選択によって成績結果に不公平感がでないように、相対評価を採用することがあります。

21世紀教育科目の『成績評価の方法と基準』でも、絶対評価を基本理念としつつ、相対評価を組み込んだ独自の設定がなされています。この機会に、もう一度読み直してみたいでしょうか。

ところで、相対評価で留意すべきことに、点数に差がつくように試験内容を工夫することがあります。点数に明確な差がなければ、秀や不可をつける根拠が薄弱になってしまいます。その一方で、絶対評価では差がつかなくても差し支えありません。

なお、どちらの評価においても、学生が到達目標に達したか否かを正確に測れるよう、試験内容に配慮が必要です。例えば、コミュニケーション能力の修得を到達目標に設定しているのであれば、口頭発表などが試験内容に含まれていなければなりません。

このように、各科目の到達目標やカリキュラム上の位置づけなどに応じて、評価方法・基準を使い分ける必要があることが理解できたと思います。とはいえ、評価基準の設定方法は、上記以外にも多々あります。そこで次に、成績評価の研究で世界的に知られているリンダ・サスキー(Linda Suskie)のワークショップ(2010年8月3日)で示された評価基準を参考に、それらの使い分けを議論してみたいと思います。

多様な評価基準

サスキーのワークショップは、以下のような仮定の提示ではじまりました。

ある学生（マイケル）の中間試験の結果は55点であったとします。果たして、彼の試験結果は良かったのでしょうか？

評価基準を定めない限り、よし悪しは判断しようがありません。そこで、サスキーは、第一の基準として、Local Standard（80点が満点で35点以上が合格）を示しました。この基準は絶対評価のことで、学生は、教員が設定した目標に到達しているかを問われます。よって、教員が設定した目標が妥当であるかが、常に課題となります。この点は先に触れたとおりです。

第二の基準は、External Standard（80点が満点の外部試験において、35点以上が合格）です。例えば、TOEICで500点以上ならば秀の成績評価を与える、といった基準のことで、外部試験で測られる能力が、科目の到達目標と合致しているかが重要になります。ところが、多くの場合は、外部試験で測られる能力を科目の到達目標に設定するという、あべこべの誤った決定がなされています。

第三の基準は、Peer benchmark（クラスの平均で合格を判断）で相対評価のことで、クラスの能力のバラツキが概ね等しければ、先述したように、公平性または競争性という点では優れた基準です。ただし、クラスの約半分は平均点以下（注意：相対評価では、中央値が平均値とかけ離れているのは望ましくない）であるという教育上問題のある事実、教員の意識が向かわなくなるという欠点が表出します。なぜなら、平均点以下の学生が存在してくれないと、定められた分布に従って成績をつけられないためです。

第四の基準は、Value-added benchmark（マイケルの点が、一年前と比べて伸びているかで判断）です。この基準は、個々人なりの努力を評価するという点で優れていて、同一科目で能力別クラスを採用している場合に用いられることがあります。しかし、30点から50点に伸びた学生と60点から80点に伸びた学生で、成績は同じであるべきかという議論は必ず出てきます。この点で教員間の同意を得られなければ、その利用は難しいでしょう。

第五の基準は、Historical trends benchmark（過去の平均点と比較して判断）です。仮に三年前の平均が40点で今回の平均が65点ならば、マイケルの成績は平均以下でなく、平均より良いと判断します。ただし、試験の難易度を毎回同じに設定するのは容易ではありません。また、教員の授業改善が反映されただけで、学生の努力の結果ではないかもしれないという疑念は払拭できません。

最後に、第六の基準は、Strengths and weaknesses benchmark（到達目標ごとに点数化し総合的に判断）というもので、例えば、「専門知識の獲得」は65点、「現実への応用」は40点というように、細分化して点数をつけます。そして、仮に「専門知識

の獲得」を重視するのであれば、 $65 \text{点} \times 2 + 40 \text{点} \times 1 = 170 \text{点}$ で成績の判断をします。この基準は、学生の学習成果を正しく評価するという点で優れています。とはいえ、到達目標ごとに点数化するという作業は困難を伴い、利用面で課題が残されているため、今後の研究開発が期待されています。

それから、サスキーはあえて言及しませんでした。affirmative standards（障害を持つ学生や、学習面で不利な条件に置かれた学生に加点）という考え方も、存在します。コミュニケーション能力の向上を目的とした授業において、高機能自閉症の学生に特別な配慮（加点を含む）を行うなどの行為が当てはまります。しかし、この種の「肯定的な差別」に対しては根強い反対意見があり、我が国に浸透するのは、まだ時間が掛かると思います。

このように多様な評価基準がある中で、どの基準を用いるのか、または、どの基準を組み合わせるのかの判断は一朝一夕でできるものではありません。というよりも、どの基準を用いるかを、学部・学科の単位で議論することがFD活動の一環になり得ます。

評価基準から見えてくる授業改善の方法

サスキーが例示したように、評価基準の設定方法によっては、マイケルの点数は良くも悪くも見えます。このことは、How good is good enough?（何がどの程度良ければ十分であるのか?）という疑問を各教員に投げかけているのと同じです。

サスキーは以下の疑問を自問自答すること、そして、同僚だけでなく、学生や雇用者、他大学の教員などを巻き込んで議論することこそ、自ら（学部・学科）が学生に本当に期待している学習成果を確認する優れた方法だと提言しています。

- ◇ What level is minimally adequate? Why?
- ◇ What level is exemplary? Why?
- ◇ How many students should be minimally adequate?
- ◇ How many students should be exemplary?
ぜひ、学生と議論して検討してみましょう。

【参考文献】

- Suskie, Linda, (2010) "Understanding and Using Student Learning Assessment Results", 平成22年度大学評価フォーラム・ワークショップ資料、大学評価・学位授与機構（2010年8月3日開催）
- 中井俊樹（2010）「学習成果を評価する」、夏目達也・近田政博・中井俊樹・斉藤芳子（著）『大学教員準備講座』玉川大学出版部、49 - 61頁。